
虫の本

館長さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虫の本

【Nコード】

N5375J

【作者名】

館長さん

【あらすじ】

貴方は登場人物でした。

名もあり、台詞もあり、外見も描写され、性別も年齢も性格も職業も経歴もその他いろんな設定もありました。

しかし、それが記された本は、既にどこにもありません。そう。

貴方はもう、決められた台詞を読む必要は無いのです。当たり前前に過ごしてきた日常も、ある本の1ページだったとしたら？

本を渡る物語《虫の本》の登場です！

```
>img src="http://id18.fm.jp/  
data/113/kousatosho/pub/38.jpg  
"/<
```

王道にとらわれない、不思議な世界へ御案内いたしましょう――

l a b o o k w o r m

```
>div align="center"<名も無き•の場合 1  
</div<
```

事の始まりは小さな《穴》だった。

小さな。

とても小さな。

その中は全く光が射す事は無く、かと言って暗闇に覆われている訳でも無い。

そんな灰色の無があった。

否。

無ゆえに“無かった”のか。

ともあれそれは、ある日突然現れたのだ。

「何だろうね、これ」

彼には名があった。

台詞も用意されていたし、細かい設定も持っていた。

胸踊る見せ場もあったし、肝を冷やす危機もあった——はずだ。

しかし、彼はそう言った。

言ってしまった。

台本には無い台詞だ。《それ》が現れなければ、決して言う事は無かったであろう、そんな台詞。

「穴……だよな？ 何処に通じているんだろう」

彼は問う。

しかし、それに答える者は誰も居なかった。
当たり前だ。

この場にいる者で、細かな設定を持つのは彼だけなのだから。
そう、●達はそれに対して何かを思う個性すら持たされていない
のだから。

そのはずだから。

そして、●も彼もその事に疑問を持つ事がなければ、気付く事もない。

それが、●達にとっては当たり前な事であり、真実であり、仕様なのだから。

「石でも投げ入れてみようか」

彼は手近な石を手に取り、その小さな穴の中に放り込む。

十秒。

二十秒。

三十秒。

……一分。

………。

石が穴の底に到達して何かにぶつかる音は、聞こえる事が無かった。

この小さな奈落に、底は無い。

「うわ、危ないなあ。よく分からないけど、これに近づいちゃ駄目だね」

確かに彼の言う通りだった。

が、この時の●は結局この穴？が何なのかなんて知らなかった訳で。

だから、●は決められた通りに動くだけ。

そう、穴がここに有っても無くても、●には関係が無い。

ただ、●はふと何の前触れもなく《それ》に気が付いた。

その時は既に手遅れだったのだけれど、気付いた所で何かが出来た訳では無いのだけれど、とにかく●は気付いてしまった。

この穴が物凄い勢いで広がっている事に。

それはむしろ、穴と言うよりも裂け目。

まるで破れて千切れそうな漫画本のページのようだ、と●は思った。

後に知る事になるのだが、その感想はあながち見当外れなどでは無く。

しかし、この時の●にはそんな事は知る由も無く。

飲み込まれる。

世界が飲み込まれる。

全てが消える。

灰色の無に食い尽くされていく。

そんな様を、●はただ何の感慨もなく眺めていた。

そう、●は何かを思う心すら持っていないのだから。

だから――そうするのが当たり前。

全てと共に自身も消滅していく最中、●はもう一つだけ気になる事を見つけてしまうのだった。

それは、自分の事について。

（ああ……そう言えば、●は自分の姿の描写すら無かったんだなあ）

●は、名も外見も性格も職業も生い立ちもその他どんな設定も台詞も、それどころか自分を指す一人称すらも設定されていない、ただの通行人Aだった。

なんという道化ぶり。

そんな事にすら、●は気付かなかつたなんて。

消えゆく意識の片隅で、●——いや、僕？/私？/俺？/ウチ？
/儂？/オイラ？/吾輩？/etc etc...？はほんの少しだけ自分を知つたような“気がした”。

“気がした”だけの、錯覚だったのかもしれないけれど、それは意外と悪い“気分”ではない。

しかし滑稽だとは“思つて”も、間抜けだとは思わない。

本来なら自我の無い●達は、そこまで考えが至る事など有り得ないのだから。

それが、その奇跡が、全知全能の神様による悪戯なのか、最高の悟りに行き着いた釈迦如来の気まぐれなのか、それとも運命という名の必然から外れた誤差なのか、はたまたどこぞの図書館の司書の陰謀なのかは、いまいち計りかねる所だけれど。

……ところで、司書って何だろう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5375j/>

虫の本

2011年1月27日06時37分発行